

ちょっと読んでみませんか（令和七年お盆）

第7話『帰還者からのメッセージ』（本源寺住職 本間健司）

今年のお盆は、終戦八十年という大きな節目のお盆となります。

大戦が終結したのは1945年（昭和二十年）八月十五日。実は、その終結の事実を知らされず、あるいは、正式なルートで通知されなかったことにより信じる事ができず、終戦後も戦闘態勢を続けていた軍人さんが大勢いたことを御存知ですか？

フィリピン・ルバング島に派遣されていた「小野田寛郎（ひろお）」さんが日本に帰還したのは、1974年（昭和四十九年）三月九日、51才のこと。なんと三十年もの間、“敵”から身を隠しながらジャングルの中で過ごしていたわけです。

三十年間のジャングル生活なんて、想像することも出来ませんよね。

小野田さんは著書『生きる』（中央研究所 2013年）のなかで、その三十年間について克明に語っていますが、特に現代の日本人にも通じる言葉について取り上げ、戦後八十年の日本について今一度見つめ直すきっかけにしてみたいと思います。

《とかく「生かされている」ことを当たり前に思っている。

わが肉体を疎かにしているのではないだろうか。「命」は神様からの借りものだと捉えたらどうだろうか。そう考えたら「命」は大切にしなければならぬ。

ジャングルの中にあっても、一年の初め、元日には赤飯を炊いた。ルバング島の島民がつくったインゲン豆を“頂戴”して米と一緒に炊く。他には、柚子・パイナップル、小芋・乾燥肉を入れた雑煮も作った。

また、樹木を利用して神棚を作り、お神酒の代わりに青ヤシの水を料理と共に供えて「一年間ありがとうございます」と手を合わせた。

生死の確信が持てない毎日を送って、何とか一年間生き延びた。見えないところで守られた、という感謝の気持ちだった。

次に宮城を遥か拝み、故郷に挨拶してから、

「おめでとうございます。今年も頑張ります！」と誓い合い、励まし合ったのだ。》

戦争は終結していたとはいえ、武装を解いていない日本兵は危険な敵として、フィリピン側から常に命を狙われていました。そんな中で、経験と知恵を駆使して食料を調達・加工保存し、それらを身に付けながら、足跡をつかまれないよう常に移動し続けなければなりませんでした。

そのため熱帯雨林の雨季であっても、雨をしのぐ小屋すら建てられず、洞窟は逃げ場が無くなってしまったため入れず、激しい雨でびしょぬれになり体温が奪われていくことが一番辛かったと記されています。本当に想像を絶します。

しかし、そんな厳しい環境にあっても、形だけでも赤飯を炊き神棚まで作って、神様にお供えし、両親先祖に感謝を捧げたかった。

それは「日本人であるという誇りを失いたくなかった」ということでしょう。その覚悟に、私は率直に深い感動を覚えました。

天皇を神様として崇拜し過ぎたことが無謀な戦争の原因だとして、戦後厳しく批判されました。

しかし、日本という国が神様から生まれ、神様に守られ、先祖達の覚悟と智慧によって2685年も途切れずに継承されてきたことは、日本人の大切な「誇り」であり「命のよりどころ」だと私は思うのです。

このような国は世界のどこにもないのでから。

また小野田さんは、祖国日本の将来を憂えて次のメッセージを残されています。

《世の中には必ず不心得者というのがある。いくら豊かな生活をしていても、泥棒に入られたらおしまいだ。そんな輩に負けていてはダメだ。

これを国家に置き換えてみてほしい。口で平和を叫び、戦争の愚を語るのはやさしいが、現実の世界ではそんな理想論は通用しない。不心得者はいつの時代にもいる。

経済でも外交でも、日本は今つけ入られる隙だらけである。「ここを狙ってきたら怪我をするぞ」と思わせなければ、ますますつけ入られるだけだろう。

私は、祖国が他の不心得国家などに負けてほしくない。自分の墓の上を土足で踏みつけられたくない。そのためには日本人の一人ひとりが、強くたくましい人間であらねばならない。》

戦争は“絶対悪”です。今現在も起きている戦争を見てもそれは明らかです。三十年以上の人生を、青春を戦争に奪われた小野田さんも、それは同じでしょう。

私は先日、家族と電車で出掛けた際、暇そうにしている中3の息子に、ふと月刊『致知』の記事を読むように勧めてみました。

『戦後80年、失われた日本の国体を取り戻す』という“お堅い”内容を、意外にも興味深く読み、色々と質問をしてきたのです。

そして、「プリントに戦後八十年のことを書くかどうか迷ってるんだよね」と言う私に、「それは書いた方がいいよ」とはつきり答えてくれました。

戦争が終わってから80年間は、「日本人の誇り・魂」を一旦横に置いて、物質的豊かさだけを目指してきた時代でした。

しかし、SNSやインターネットで世界中とつながった現代の若者こそが、その違和感に気付き始めているのではないでしょうか。

「自分は何者なんだろうか」と。

そこで、戦後80年目のお盆は、いま一度、大人も子供も、先祖さんと戦争の英霊に心から感謝の誠を捧げながら、一旦横に置いてきた「日本人の誇り・魂」に正面から向き合う時間に見てはいかがでしょうか。

「不心得者などに負けない強くたくましい日本人」は今もたくさんいるし、これからもきつと育ってくるに違いない。私はそう強く信じ、祈っています…

合掌 南無妙法蓮華經